

自由論題 6

報告テーマ

農業、土地市場、人口移動：インド農村家計パネルデータの実証分析

Agriculture, Land Market, and Migration:

An Empirical Analysis of Micro Panel Data of Rural Households in India

氏名(所属)

和田 一哉(金沢大学)

Wada, Kazuya (Kanazawa University)

要旨(800字程度)

インドは独立後長期にわたり経済停滞に喘いできたが、1990年代の経済改革に代表される努力が実を結び、近年の経済成長は世界の注目を集めている。伝統的な二重経済モデルによれば、経済成長を支えるのは農業部門の健全な発展である。独立後インドは着実に農業部門を改善し、経済成長を直接間接に促してきた。ただしインドの一部の地域ではいち早く農業離れが始まっていたことを看過すべきでないだろう。このような一連の流れの要因は、ひとつには農業部門の市場広域化が挙げられよう。その意味では農業部門も効率化を達成することによってさらなる経済発展へと歩んでいると考えられる。近年のグローバリゼーションの浸透は、インド経済をさらなる効率化へと促進していることが想像される。

インドの農村はその他さまざまな影響を受けて急速に変わりつつある。たとえば、都市地域の拡大とそれに伴う農村の都市化が挙げられる。インフラの整備が進み都市へのアクセスが飛躍的に向上することで、農村が都市への通勤圏となり、農村で暮らす人々の所得源は必ずしも農業だけではなくなくなった。非農業の就労機会の拡大は人々の教育に対する期待を高める反面、同時にそれは農業への期待を低下せしめるものでもある。

かつてのインドでは農村は人々が生活する空間としてきわめて重要な位置づけにあったが、徐々に農村人口は減少している。今なお6割を超える人々が農村で暮らしているが、経済のさらなる深化により今後農村人口は一層減少することが予想される。他方、農村において土地は今なお富を生み出す重要な生産要素であり、またその所有は社会的地位の高さを示すという側面を完全に失ったわけではない。代々受け継がれてきた土地を手放すことはもちろん、離村することも容易ではないケースがあることも想像に難くない。

複数の先行研究で、インドの農業は特化と集約化を通じて生産性の向上を進めてきたことが指摘されている。また他国において、農村土地市場の流動化を通じて経済全体の効率化を促進したことを指摘する先行研究もある。生産の効率化は必然的に生産資源の再配分を伴うものでもあり、その影響は一産業内にとどまらない。本稿で特に注目するのは農村における土地と労働力である。インドの農村における土地の流動性の動向、そしてそれに伴う人口移動を調べることで、今後のインド経済の課題や可能性を見出すことが期待される。